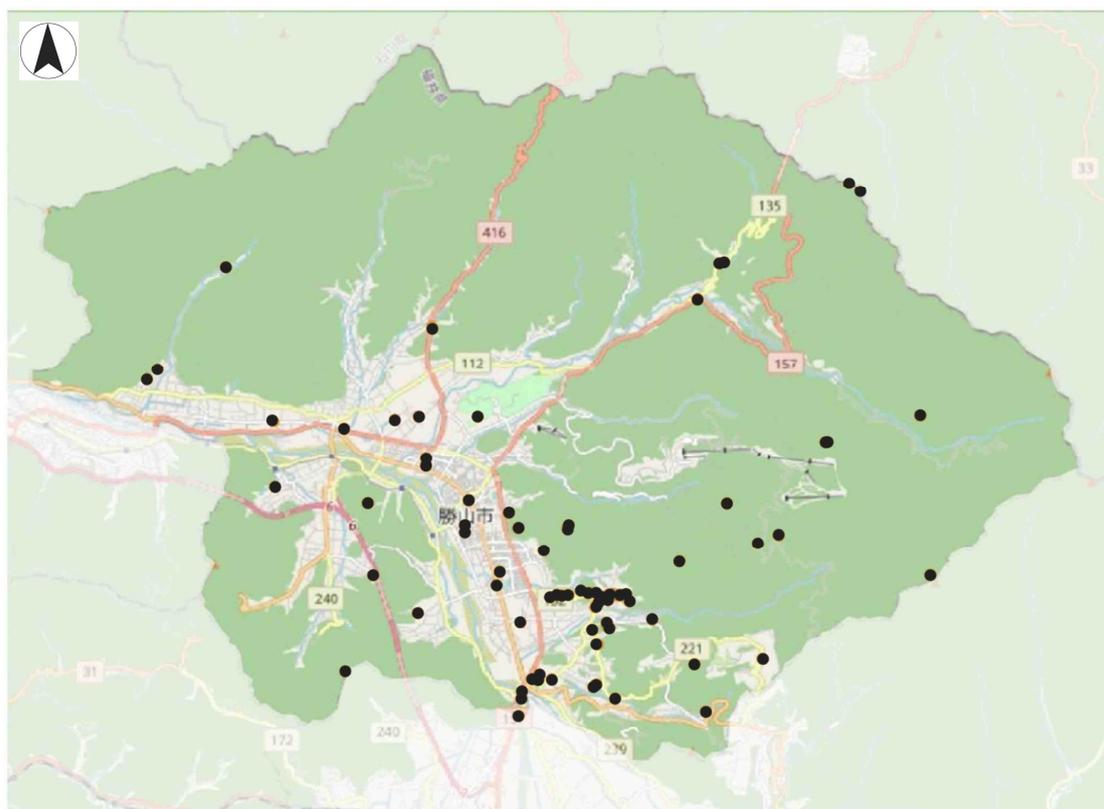


⑤白山信仰と「中世宗教都市」平泉寺(泰澄と白山信仰の広がり、平泉寺の隆盛、平泉寺の焼亡)

平成元年(1989)から発掘調査がはじまった平泉寺では、多数の坊院跡や石畳道などが見つかりました。「中宮白山平泉寺境内図」の景観や発掘調査の成果から全国でも屈指の「中世宗教都市」と評価されています。核となる文化財は、白山平泉寺旧境内(国指定)、旧玄成院庭園(国指定)などがあります。

平泉寺と関係するものとしては、市内にある多数の白山神社をはじめ、^{おかとこえ}岡横江・三谷などの平泉寺の^{とりで}砦跡、猪野の泰澄母の墓所(市指定)があります。また、伊波の白山神社は白山七社の一つ「佐羅社」であるといい、平泉寺に至る第一の門があったと伝わります。「中宮白山平泉寺境内図」には比島^{ひじま}観音と下荒井^{げあらい}の^{ぜんじ}禅師王子を結ぶ九頭竜川対岸までの範囲を四至として描いています。平泉寺から白山に至る白山禅定道には、絵図に描かれた堂社の跡とみられる平坦地や階段、出入口、土塁、池などが残り、付近には滝や岩場、洞窟など修行の場が点在しています。

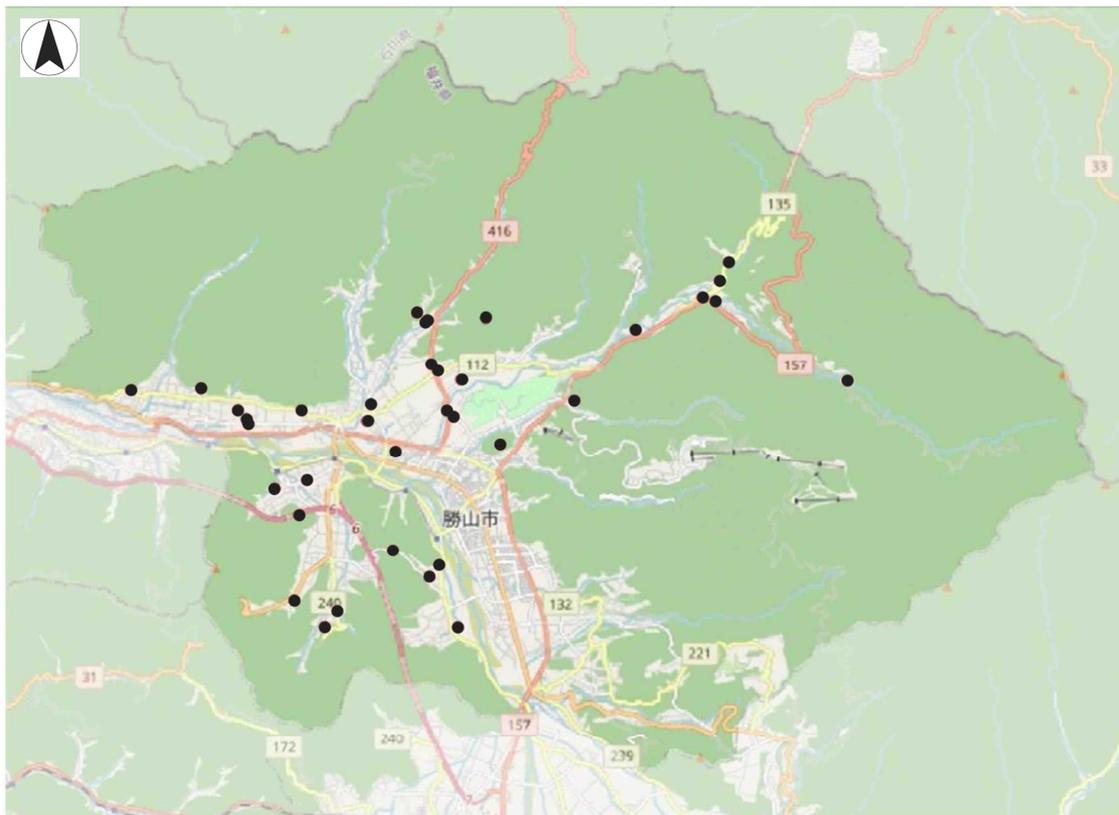
平泉寺と一乗谷の朝倉氏との関係は宗教的・政治的にも緊密で、両者の間を人・モノ・技術が往来しました。安波賀街道は平泉寺と一乗谷を最短距離で結ぶ経路と伝えられ、付近には鹿谷の入口ににらみをきかせる西光寺(保田)城跡が残ります。



文化財の分布

⑥真宗信仰の広がりと一向一揆(白山麓の一向一揆と山城)

市内には、浄土真宗を北陸に広めた蓮如の足跡を思わせる腰掛石、御用水、名号などが伝えられています。吉崎に下向した蓮如が、平泉寺への参詣途中に立ち寄ったという野津又長勝寺、同じく弟子になったという西念寺など多くの伝承が残されています。また、村岡山は一向一揆が平泉寺との戦いで城を築き、それに勝利したのを祝して「勝ち山」と呼ばれ、「勝山」の地名の由来になったと伝わります。このほかに一向一揆の拠点としては、西光寺(保田)城跡、壇ヶ城跡、谷城跡、野津又城跡、三室山城跡などがあります。



文化財の分布



村岡山城跡



蓮如木像

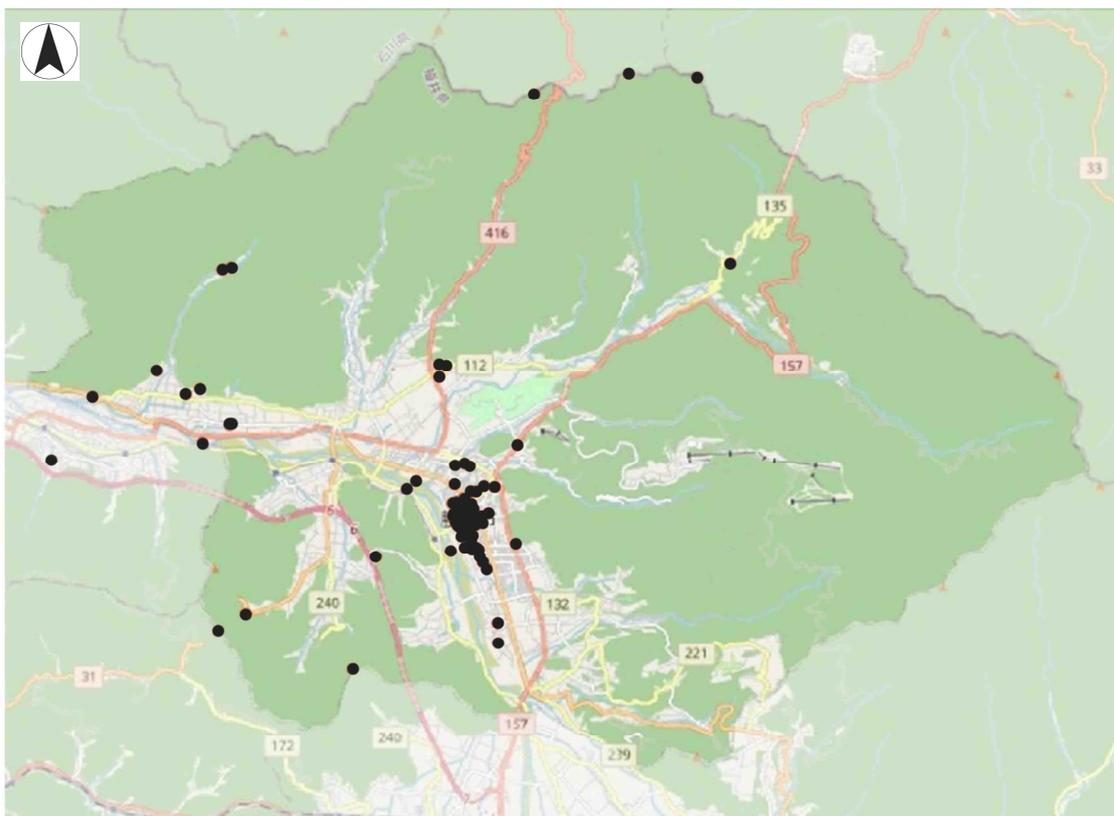
⑦勝山城下町と他藩との交流(柴田勝安の「勝山城」築城、平泉寺から「北袋」へ、松平氏の支配、小笠原氏の勝山入封、勝山藩・郡上藩・鯖江藩等の支配、町と村のくらし、城下町と周辺の村々の交流、大野・福井・白山麓との往来の要、江戸時代の宗教)

一向一揆を平定した柴田勝安は、新しい支配の拠点である「袋田(勝山)」に城を築きました。江戸時代の初めには、福井藩祖結城秀康の子である松平直基を藩主とする勝山藩が成立します。その後入部した小笠原貞信の頃の城下町景観は、「元禄時代勝山町図」(市指定)に描かれています。

当時の市域には勝山藩、郡上藩、鯖江藩、幕府領などの領地がありました。勝山藩領は、城下町近辺から北郷まで九頭竜川右岸に偏在しています。郡上藩領は猪野瀬地区など市域南部や野向、荒土、北谷などに広がり、若猪野に代官陣屋、野津又に勘定などを手伝える割元が置かれました。鯖江藩領の鹿谷では、大野木本の大庄屋まで矢戸坂を越えて出向いていました。

勝山城下町では1と6のつく日には市が立ち、藩を越えた地域経済の中心となっていました。城下町には、現在も歴代藩主の菩提寺や、庶民の信仰した浄土真宗寺院が残っています。また、藩校成器堂の建物は市内各所に移築され大切に使われています。

九頭竜川に沿う市域は、古くから往来の要となっていました。特に勝山城下は、福井城下から勝山城下、さらに大野を経由して郡上八幡へ通じる勝山街道と、勝山城下から北谷・谷峠を経て牛首(石川県白山市)にいたる街道との結節点にあたります。これらの街道沿いには行先を示す石碑が多数残され、交通の拠点としての姿を伝えています。また、九頭竜川には鵜島の渡し(市指定)など4か所に渡しがありました。

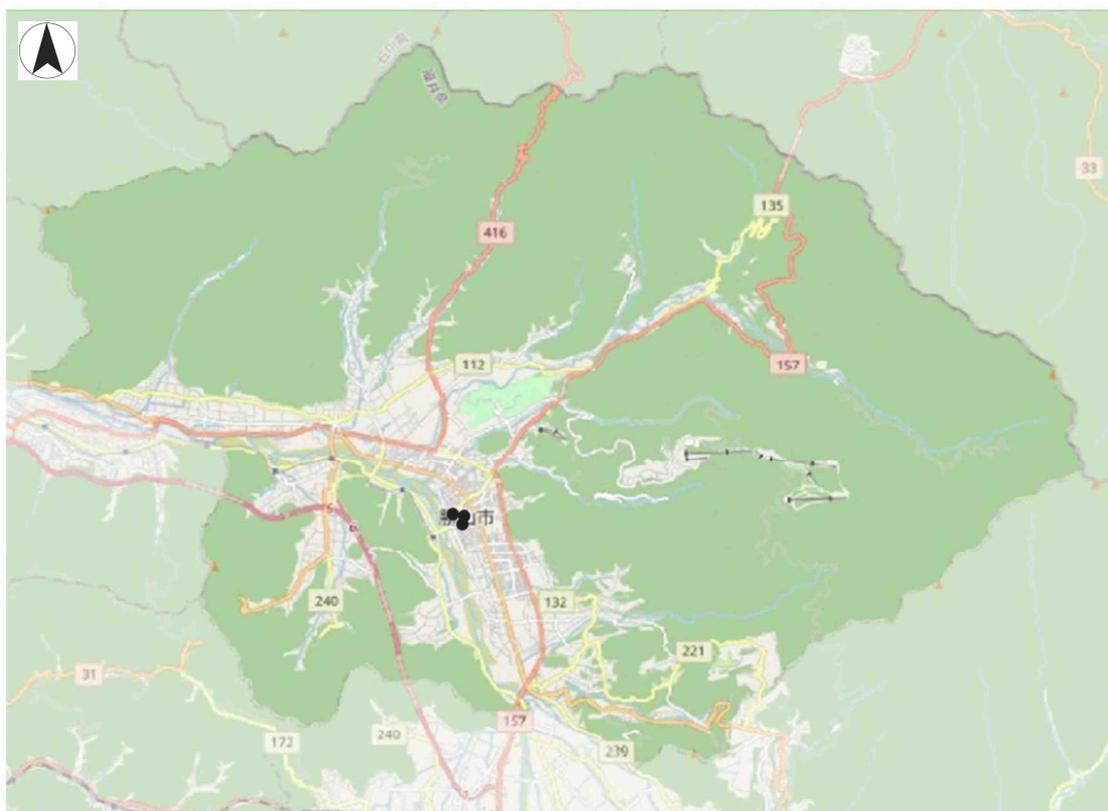


文化財の分布

⑧勝山左義長と城下の行事(町と村のくらし、城下町と周辺の村々の交流、江戸時代の宗教)

勝山左義長(県指定)は江戸時代に勝山城下町(勝山三町(郡町・袋田町・後町))の行事としてはじまったと考えられています。勝山左義長では、町内ごとに櫓を建てて笛や太鼓で囃し、短冊や絵行灯をつるすことに特徴があります。左義長の最後を飾るのがどんど焼きで、正月の松飾りや書き初め短冊などを燃やし、松飾りなどで出迎えた歳神様を炎とともに見送る意味があります。

また、勝山城下町では、左義長の他にも御前相撲や顕如講、走りやんこ(市指定)などの信仰、祭礼行事が現在まで続いており、周辺から多くの人たちが訪れます。



文化財の分布



勝山左義長

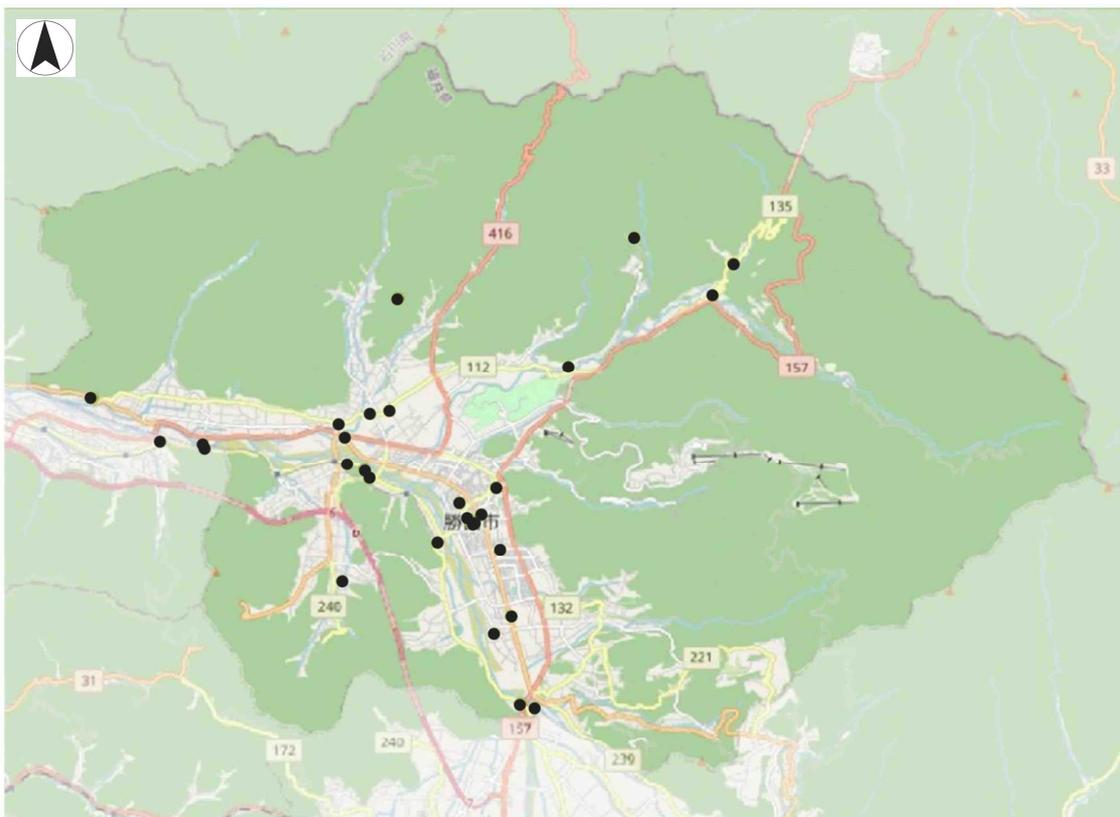


走りやんこ

⑨たばこ製造・製糸業から織物業へ(勝山の明治維新、九頭竜川と交通、たばこ産業の隆盛、繊維産業と発電・鉄道)

江戸時代から続く勝山地域の特産品たばこと繭・生糸の生産は、明治時代に入って近代化が進められます。明治時代終わり頃には、たばこと生糸の生産から織物業へ勝山の産業が大きく変化します。明治37年(1904)建築の織物工場を保存・活用しているはたや記念館ゆめおーれ勝山(市指定)では、力織機や糸繰機・整経機などが動態展示されています。昭和元年(1926)築の羽二重保管倉庫を保存・活用しているケイテー資料館にも、勝山の近代産業を知ることができる資料(市指定を含む)が多数所蔵・活用され、昭和初期に建設された織物工場が続く景観も残ります。産業の発展とともに町の中心部には料亭街も形成され、明治30年(1897)建築の旧料亭花月楼(国登録)は改修後、食事処として活用されています。

また、明治41年(1908)、京都電灯株式会社は勝山の豊かな水量の河川と山地を利用して、水力発電所を中尾に建設し、織物工場や一般家庭に電気を供給するようになります。ゆめおーれ勝山の広場には、旧中尾発電所第1号発電機(市指定)が展示されています。その後、より安定した電力の供給先として、大正3年(1914)4月に北陸初の電気鉄道である越前電気鉄道が開業しました。電気鉄道は、人だけでなく、織物の原料や織物製品、木材など物資の運搬にも大いに利用され、産業の発展に寄与しました。現在も地域の重要な公共交通機関となっており、開業時に建設された勝山駅本屋とホーム待合所(国登録)は駅舎として使われています。



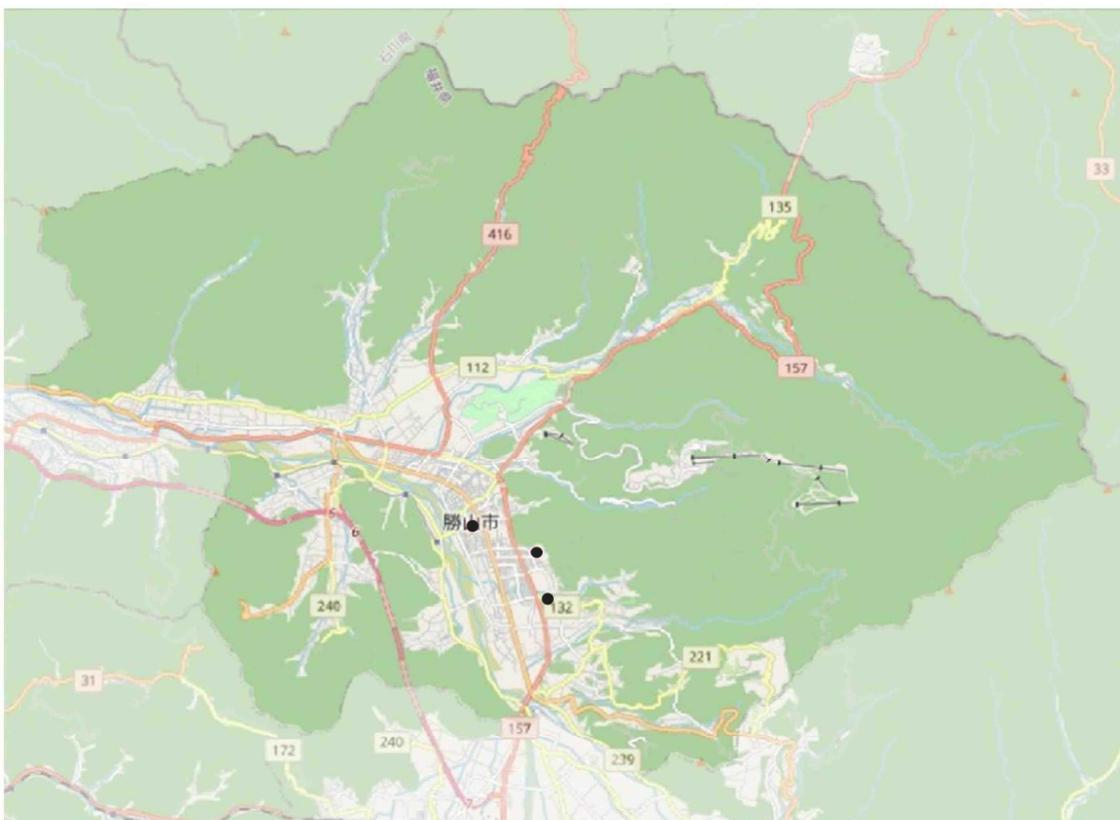
文化財の分布

⑩近現代建築と芸術文化の醸成(勝山市の誕生、現代建築と文化の醸成、歴史文化を活かした地域づくり)

昭和から平成にかけて、越前大仏、勝山城博物館、県立恐竜博物館など、勝山を代表する巨大建築が建設されました。これらは、新たな集客周遊のための拠点として捉えることができます。

勝山地区には磯崎新氏の設計による住宅が2棟、村岡地区には黒川紀章氏の設計による県立恐竜博物館などがあり、芸術性の高い建築物が存在します。なお、磯崎新設計の住宅は、全国でも10数軒しかなく、貴重な事例となっています。

また、近代の産業の発達は、地域内外の人や文化の流入をもたらし、文化に対する意識が高まります。これが戦後の小コレクター運動などへとつながっていきました。



文化財の分布



越前大仏

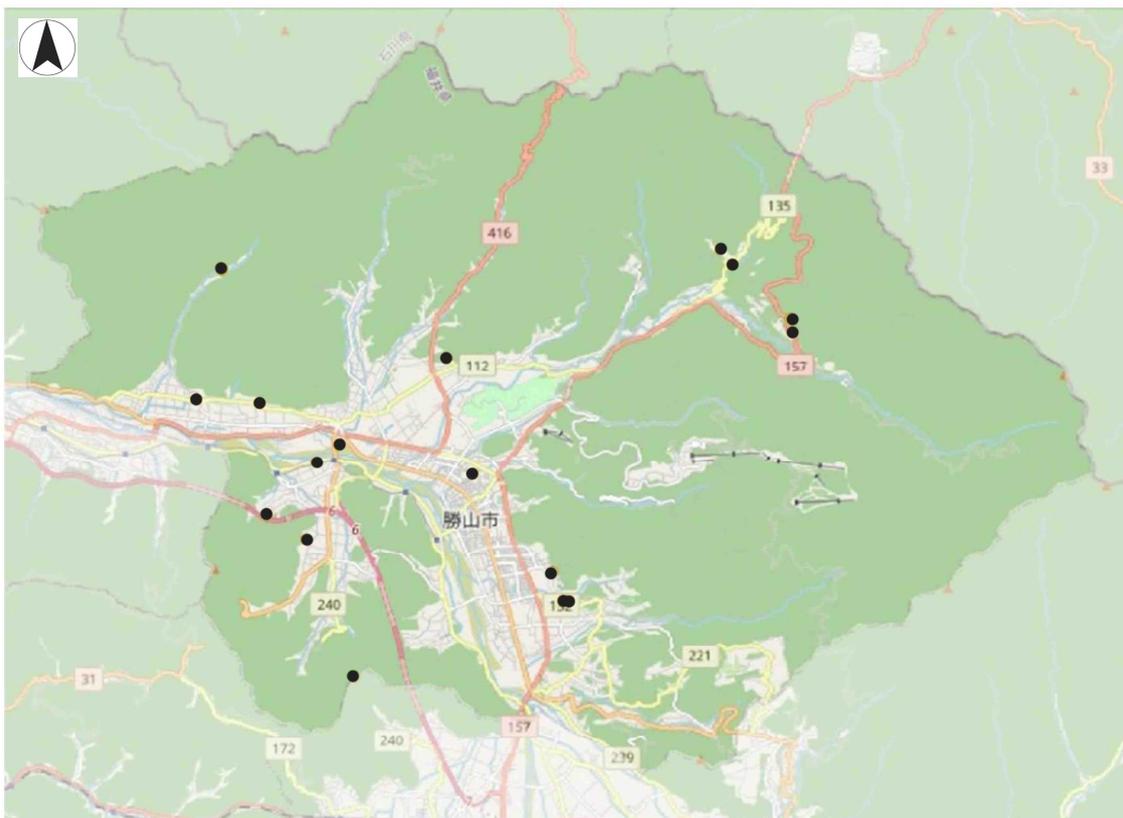


勝山城博物館

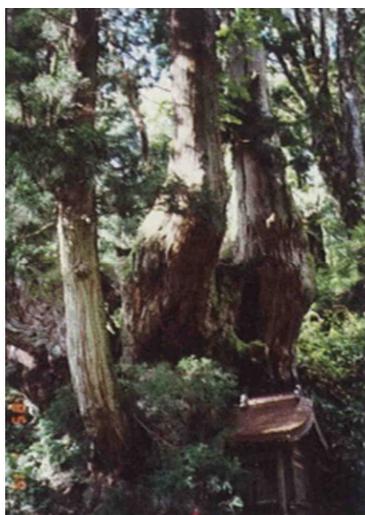
⑪雪国の自然と巨木の信仰(自然と風景、町と村のくらし)

加越国境の山々から九頭竜川に広がる山野には、豊富な雪解け水を利用する集落や水田が広がります。ミチノクフクジュソウ自生地(市指定)など、貴重な自然環境があり、鯖の熟れ鮓しなどの「食」を例として、自然と共生した暮らしが残っています。白山に連なる大日山、法恩寺山、経ヶ岳などが雪をまとう山容は、雪国の絶景をつくり出しています。

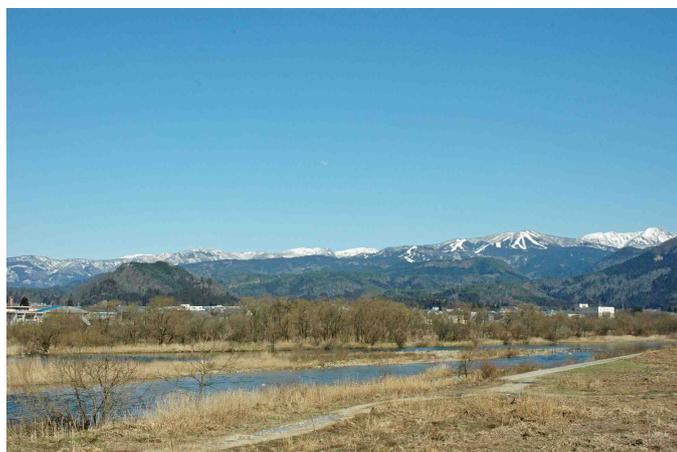
岩屋の大杉(市指定)、西光寺の大杉(市指定)などの樹齢数百年の巨木は、地域の信仰の対象ともなっています。



文化財の分布



岩屋の大杉

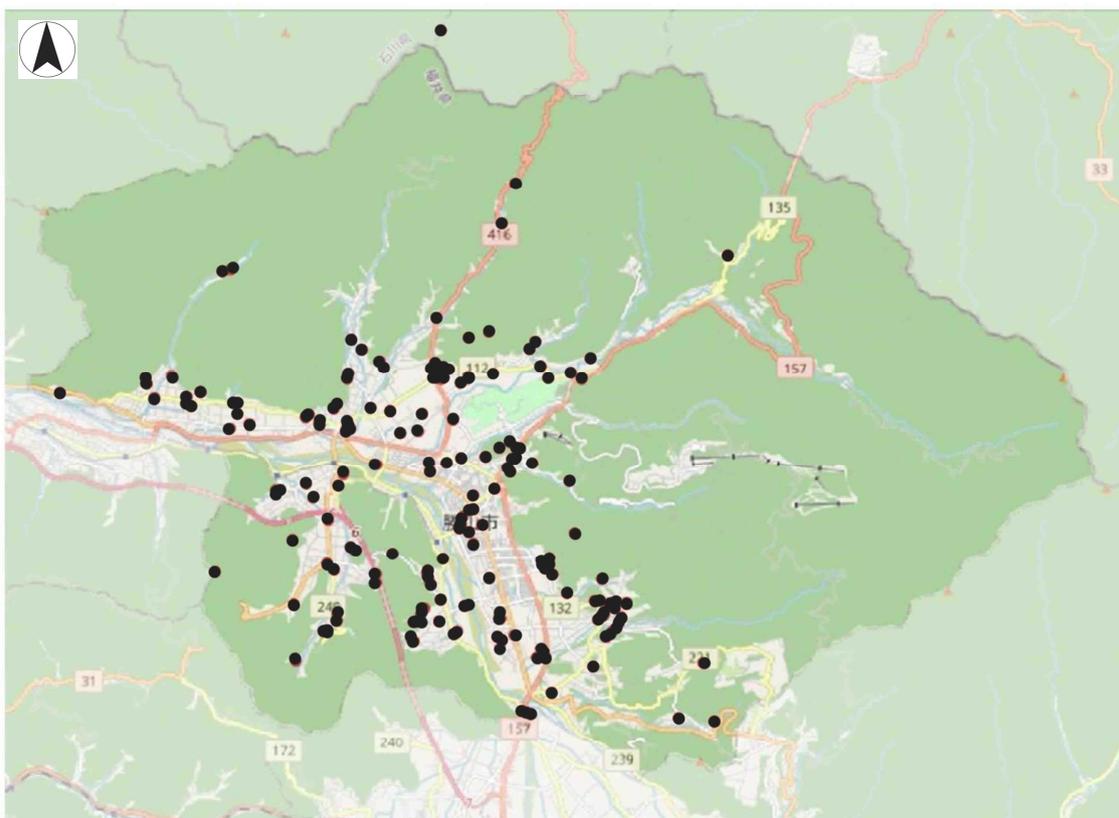


白山に連なる山容

⑫近世農村の営みと真宗信仰(町と村の暮らし、江戸時代の宗教)

江戸時代の農家建築が現地にそのまま保存・活用されている旧木下家住宅(国指定)をはじめとして、各集落には江戸時代から昭和にかけての農家建築が残されています。また、それぞれの集落では、お面さん祭り(市指定)、観音さまのおすすめ(市指定)などの祭りがあり、大正末期から昭和初期までは左義長も行われていました。戦後、左義長の伝統を復活させ、現在も行われている地域があります。

村々には真宗道場や講など真宗の信仰が強く残り、関連する建築、仏像などは地区において大切に守られています。また、そのほかの神社や寺院、信仰に関わる石造物なども数多く確認できます。なお、浄土真宗の行事「報恩講」とその料理や串柿・ござぼうしなど、暮らしに根差した食文化や伝統技術も残されています。



文化財の分布



旧木下家住宅

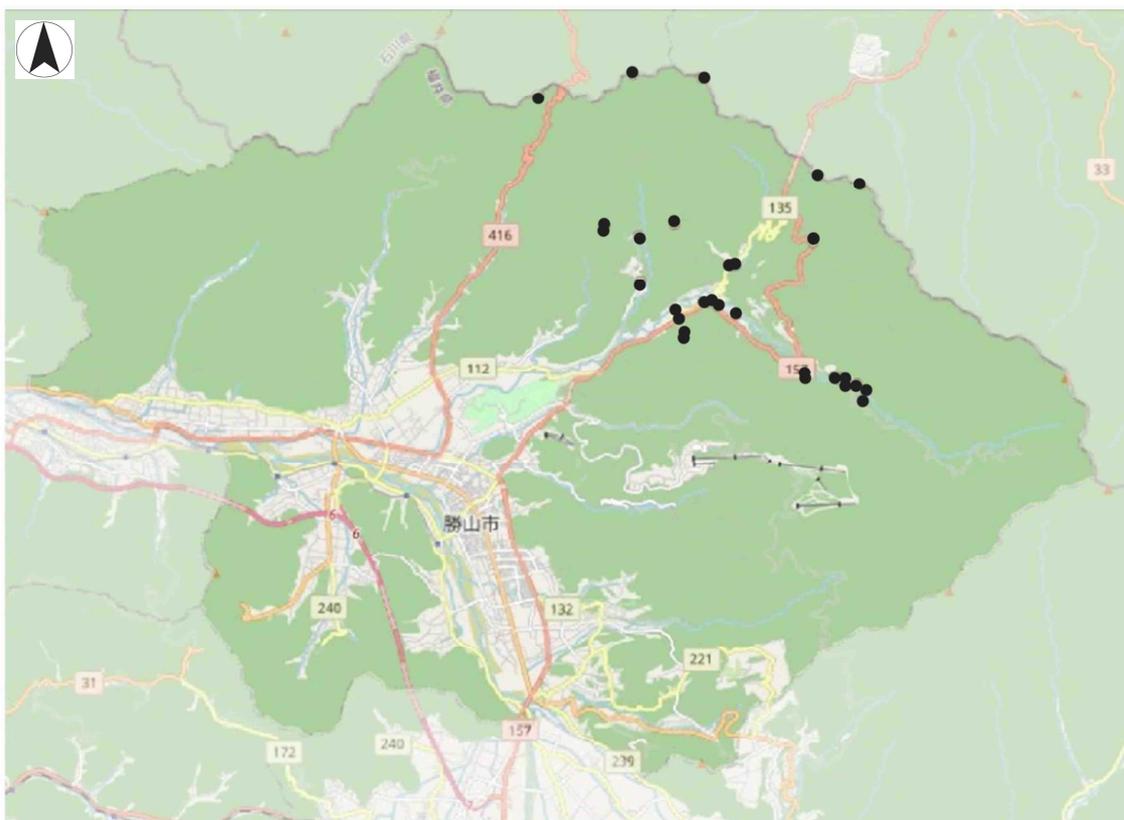


観音さまのおすすめ

⑬白山麓の山村文化(町と村の暮らし、大野・福井・白山麓との往来の要)

白山麓や加賀に通じる峠越えの街道に沿った山間部では、豪雪地帯の厳しい自然環境の中で集落が形成されています。谷は、江戸時代に勝山と牛首(石川県白山市)を結んだ街道の中継地として栄え、街道の一部である石畳道(市指定)が残ります。また、野津又から大日峠を越えて加賀新保へ通じる街道も重要な交通路でした。

このような山村に伝わる文化としては、能面に豊作を祈念する行事である谷のお面さん祭り(市指定)があります。また、山村の特徴的な住まいとしては、斜面を階段状に造成した屋敷地に建つ大壁造で木造二階建ての小原の住宅があります。このような建築は、石川県白山市白峰などと共通するものです。



文化財の分布



谷の石畳道



小原集落の家並み

【日本遺産】 400年の歴史の扉を開ける旅 ～石から読み解く中世・近世のまちづくり 越前・福井～

「日本遺産(Japan Heritage)」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するものです。

勝山市では、平泉寺と勝山城下町が「400年の歴史の扉を開ける旅～石から読み解く中世・近世のまちづくり 越前・福井～」のストーリーで、令和元年(2019)に日本遺産の認定を受け、文化財の保存だけでなく、積極的な活用が図られています。また、この日本遺産は、福井市と勝山市の複数の自治体にまたがってストーリーが展開する「シリアル型」として認定されています。勝山市内では、未指定文化財を含めて10件が構成文化財となっています。

《ストーリーの概要》

越前・福井には、中世に大量の石を用いて計画的につくられた2つの都市が誕生し、今も独特の空間を醸し出しています。また、近世の福井城下町は、風景に溶け込む美しい青色の笏谷石が天候によって町並みの色合いを変化させ、勝山城下町では、自然の力がつくった階段状の地形を活かす町に石の壁が続いています。

さまざまな形に姿を変えて時代を越えてきた石が私たちを出迎える越前・福井は、日本人と石との共生の歴史や屈指の石づくり文化を体感させてくれる地です。

■石づくりの中世宗教都市と戦国城下町

古くから北陸道諸国の都からの入口であった越前。中世には大きな二つの「都市」、白山平泉寺と一乗谷が生まれました。平泉寺は、全国的にもいち早く多くの石を使って計画的な「都市」をつくりあげ、越前での石を使ったまちづくりのルーツとなりました。その技術は一乗谷へと受け継がれていきます。

〔勝山市内の構成文化財〕

白山平泉寺旧境内(国史跡)、中宮白山平泉寺境内図、安波賀街道、九頭竜川、白山平泉寺出土品

■近世城下町のまちづくりと石

一乗谷と平泉寺が滅びた後、石に関する技術は、新たに築かれる近世の城郭と城下へと受け継がれていきます。福井城とその城下には、「笏谷石」が大量に用いられました。勝山城とその城下町では、武家地と町人地をわける南北方向の高さ5～7mの河岸段丘崖「七里壁」に川石を使った石垣が築かれました。

〔勝山市内の構成文化財〕

七里壁(市史跡)、旧勝山城下の街並み景観、大清水

■石に現れた日本人の美と信仰

石は美の表現や信仰の対象にも活かされました。中世の平泉寺や一乗谷につくられた石を使う庭園や、笏谷石製の石仏・石塔は、当時の人びとの美意識や精神文化、祈りの心などにふれることができます。また、神社には美しい造形の狛犬を数多く見ることができます。

〔勝山市内の構成文化財〕

旧玄成院庭園(国名勝)、白山平泉寺の石造物